

日本声楽発声学会 学会通信 第53号

2025年(令和7年)5月

◆ 最近ふと思うこと

会長 佐々木正利

早いもので今年も4分の1が過ぎ去ろうとしています、会員の皆様にはお健やかに過ごしのことと存じます。まだまだ油断はできませんが、コロナ禍という未曾有の患難を乗り越えて、当学会にも穏やかに声楽発声研究に勤しむ日々が戻ってまいりました。

この頃今更ながらにして、学会とはどのような活動をするところなのだろうと考えることがあります。なぜかと申しますと、最近頃に、学会における研究発表者の資格やそのレベルに疑問を持つ機会が増えてきたからに他なりません。周知の如く、とても残念なことに、当学会では例会における研究発表の応募者が極端に少なく、また投稿論文のそれも推して知るべしとなっています。

それに対して、小生が長年に亘って役職を務めているある学会では会員数も増加の一途を辿り、開催される大会での研究発表も昨年実績で何と44件ありました。論文投稿数も同様の傾向があり、小生も毎年のように査読委員を務めております。勿論、その学会と当学会では専門分野の種別が倍ほど違いますが、最たる相違点は、研究発表受理時に内容審査がない(水準の優劣は発表者に帰責)ことと、中身を直裁的に批判しない(異論・反論は別として誹謗・中傷の類はご法度)ことなどが挙げられます。その点当学会では、研究発表の申込みは受理前に審査がありますし、明らかな非見識には襟を正して対応しています。無論、先の学会においても優れた発表も多々存在しますが、時には学生レポートのような発表もあり、また小さい歌曲集を楽曲解説とともに演奏するだけで発表とするものまであって、果たしてそれが研究発表と言えるのかと疑問すら抱くものまであります。根底に問われるのは学会の基本理念に関わることなので、一概に言及することはできませんが、私たちも一度原点に立ち返って倫理や理念を整備する必要を感じ、今委員会を組織して議論を積み重ねているところです。その一環として、まずは「日本声楽発声学会(JARS)研究発表規程」の全般的な見直しを理事会で協議し、次回総会にてご意見を賜りたいと考えています。

ところで、私の愛読書に『生き方が変わる、心のサプリメント 101錠』(岐阜県多治見市教育委員会村瀬登志夫教育長著、扶桑社刊・絶版)という本がありますが、その中に「世の中、一字の違い」という項があり、その一文を紹介します。【「おいしいものを食べる」と「おいしくものを食べる」。一番いいのは「おいしいものをおいしく食べる」。子育てには「手間がかかる」が、積極的に「手間をかける」としたい。また「人にほめられる人」もいけれど、「人をほめられる人」はさらにすばらしい。】

私はかつて教育学部で教鞭を取っていましたが、将来教職に就く学生たちに口酸っぱく言っていたことがあります。それは、先生は子供たちの前では先生だが、保護者はともかく、一般の人の前では先生でも何でもない普通の人間なのであり、間違っても教育現場以外で先生ぶってはいけないよ、と。

世の中で先生と呼ばれる職業を思いつくまま挙げてみますと、教師、医者、小説家、画家、政治家、弁護士等々、何と多いことでしょう。「先に生まれた」以外に「先生」という言葉にどんな意味があるのか。生きてりゃ誰でも年上なら先生だとすれば、尊敬できる人が「先生」以外の人だったら単なる社交辞令になってしまいそうです。先生と呼ばれ慣れると、この社交辞令を間違えていつの間にか自分は偉いんだと勘違いしがちになります。そういう方は、「人にほめられる人」の味を知っていつしか中毒となり、「人をほめられる人」の価値を忘れているのではないか。周りへの感謝を常に大切にしておられる方ばかりですと、研究発表規程の全般的な見直しなど必要ないのにと、任期の最終年度を目前に控えてふと思ってしまいます。

◆ 第115回例会 アンケート結果

当日配布プログラム記載のQRコードアンケートより貴重なご意見をいただきました。

【プログラム構成について】

あっという間の一日でとてもたくさんの学びがあった／参加者に内容を一生懸命伝えようとしてくださり、専門的な内容ながら自身が消化できる範囲ではあるが興味深く拝聴した

【パネルディスカッションについて】

3人のパネリストの発言時間を同じくらいにするよう工夫があればよかった／科学的なエビデンスと教育現場での実際の指導法の板挟みについて、ベテランの指導者でも模索をされている様子が伺え、共感すると同時に声楽指導のむずかしさを痛感した

【現役声楽家の演奏とお話】

素晴らしい演奏だった。本格的なリサイタルやオペラもぜひ聞きたい

【今後の学会運営、講演などについて】

例会や夏季研修会の他に、会員が興味を持てるようなテーマの講習会や講座があれば、年会費とは別に参加費が必要であっても参加したい(例:アレクサンダーテクニークを学ぶ、声楽指導のための基礎解剖学など)

ご回答ありがとうございました。

なお、研究発表の録音録画に関して理事会・事務局と発表者の事前確認が不足し、参加者の皆さまにご迷惑をおかけしました。理事会としては、今後、研究発表における規定を明文化し、発表者には十分ご理解いただいたうえで発表に臨んでいただくよう準備を進めています。

第53号、第54号の特別企画は、「10年後の発声学会」と題する理事からのメッセージです。例会等の準備に追われる日々からしばし離れ、「10年後」あるいは「未来の発声学会」に思いを馳せた企画…会員の皆さまもぜひ「学会の未来」を思い浮かべてみてください。

音声生理学に基づく研究のみならず、さまざまなジャンルとの交流、指導法・演奏法の情報交換が活発になり、「声のことなら発声学会に相談してみよう」と広く認知される・・・会員数が増え、例会や夏季研修会では、全体講演のほか分科会も行われる・・・それらは参加できなかった会員にも広く共有される・・・これらの活動の中から新たな研究課題が生まれ、異分野の会員が協力して研究を進める・・・誰もが安心して「自分の声で表現できる」そんな学会、そんな世の中になったらいいな、と想像します。(入川めぐみ)

● ● ●

声は多様性そのもの。しかしながら、声を扱う多くの現場では、多様性とは逆行した、いわば一様性のカタにはめてしまう指導が横行しているのも現実のように思われる。個性である「声」がしっかり輝くために、多くの研究や知見が表現の現場と連携して繋がる未来に期待したい。「研究者の研究者による研究者のための学会」にとどまることなく、声を扱う表現者との密な連携によって、多様な声のあり方に帰依できる、そんな学会であって欲しい。そのために、研究と実践を繋ぐ存在で私自身もありたいし、本学会が、そういう見地の指導者を多く輩出できる学会でありたい！と、強く願う。(上杉清仁)

グローバル化が進み、学会での研究が海外でも話題になり、海外の研究者や演奏家とも学び合える姿があればいいと思います。伝統と新しい科学的な知見とが同等に重要であるという認識を、世界のすべての歌い手と指導者、歌手を目指す者が持つことのできている未来が来てほしいです。国内では学会の活動が注目されることによって、クラシック音楽の聴衆を増やす、裾野を広げる、企業や自治体（もちろん国も）の理解と援助を得る、演奏の質を上げる等々の影響を与える日が来てほしいです。加えて学会での研究成果が小学校や中高の、所謂学校音楽における歌の指導にも良い方向性を示せる日を待ち望んでいます。

(梅村憲子)

● ● ●

「こえ」は個性、多様性の鏡であり、その人自身でもある。その声が外に出ていき他者と交わる際の手段が発声技術。狭義での「クラシック」「西洋音楽」発声のみならず人間のコミュニケーション手段の根本と考えれば、利他的行為と他者の役に立つことによって幸福感を得るホモ・サピエンスの幸福がここにかかっていると言っても過言ではない。更に美学的な観点からは、コミュニケーションの機能部分に加えて「こえの美しさ」を求めることで、数値化、定量化されたものしか評価されない資本主義の弱点を補って、人間中心の現代社会をアップデートして地球全体を幸せに出来る鍵もここにある。「こえ」を扱う本学会の未来をここに見る。(小森輝彦)

AIの進歩により、感動を与える要素や構成が抽出され、それを反映した音楽が作られようとも、聴いた人が皆、感動することは無い。人の奏でる音楽、それを聴く人と、互いの関係は技術の進歩とは別の地平にあり、音楽自身が進歩した訳ではない。それは医学も同様で、進歩したのは機器や技術であり、人が人を看ることに進歩が起きた訳ではない。むしろ、人と人との関係が崩壊していることが現在の問題である。終日誰とも話さないで過ごせる世界、ネット上の仮想空間に溺れ、妄想社会で生きる個人も増加している。発声行為、歌唱は自分自身を対象にするものではないから、本学会の存在意義は重要であり、人とは何かを思考する根源が必要であろう。(三枝英人)

● ● ●

若い学生たちが中心のグループと耳鼻咽喉科やお医者さんのグループ、声楽家たちのグループと(若手もベテランも)それぞれの中でリーダーを決める。学生たちや若い声楽家で発声に悩みを抱えている人たちが中心にどんなことを勉強したいか、知りたいかを提案してもらう。それに添って例会の内容を組み立てながら、ざっくばらんに意見を交わしていき、最終的にその例会や研究会での成果を、コンサートを行い、舞台での経験を積んでいく。発声学会ならではの先生方の研究発表はずっと続けていきたい。(佐橋美起)

10年後といいますと、2035年。当然のことながら、生成AI等デジタル技術の発展やテクノロジーの進展が予想されます。また、高齢化の社会となりますので、高齢の会員の参加も増えてくると予想されます。おそらく、そこで活躍するのは、「ロボット」かと思われます。現在でも、ファミレス等で導入されつつありますが、発声学会でも、受付、マイクの受け渡し、荷物の移動等で大活躍するのではないのでしょうか。口頭発表の際の機器もさらに進化して、音や映像の質がさらによくなり、迫力のある、リアルな研究発表が展開され、ますますおもしろくなっていくのではないかと期待されます。(鈴木慎一朗)

● ● ●

学会では毎回声楽家と脳科学者が新しい研究成果について議論している。音大の授業には脳科学入門と音楽脳科学の講義が開講されているため、音楽家も自分たちの脳に関する知識をもっている。声楽のレッスンでも、脳をどのように使うと良いかということや、脳内演奏のテクニックが体系化され、活用されている。

さらに10年後のこと……脳科学は文学化し、音楽などの芸術創作活動の脳内プロセスがわかりやすく語られる。多くの学問分野が垣根を取り払って、異分野間のコミュニケーションが普通に行われるようになる。学会の内外で、日本のあちこちで、専門家も一般の人たちも芸術や科学の話題を取り上げて語り合い、人生を楽しむ……という夢を見た。(田中昌司)

● ● ●

第54号には会長、副会長をはじめとする7名が描く「未来」を掲載します。ご期待ください。

第115回例会終了

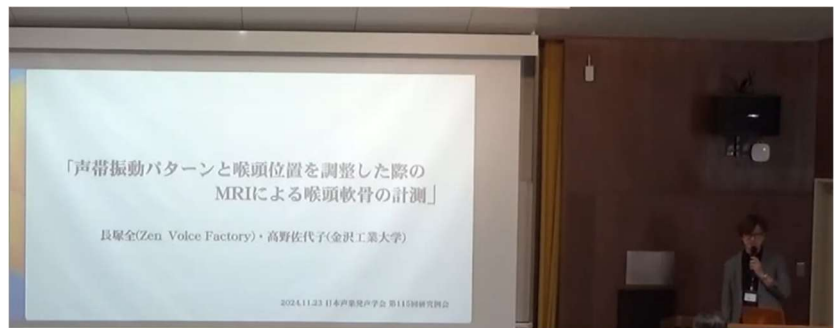
お出かけ日和の11月24日(日)、色づいた銀杏と人気の展覧会やイベントで驚くほどの人出となった上野公園を通り抜けると、東京藝術大学では第115回を迎えた例会開催。今回は、運営サイドの事情により開催告知が遅れ、会員の皆さまにはご心配をおかけしましたが、臨時会員を含め64名にご参加いただき、有意義な一日となりました。

◎ ◎ ◎

午前中は、会員による研究発表が3件。齊田晴仁氏は、「声道形態調節による音声の聴取実験結果(2023年秋例会)の分析：声区指導の現状を考える」と題し、未だに混乱する「声区」の考え方を科学的に解明すべく、昨年行われた聴取実験結果も踏まえつつ研究の成果を発表。今後、指導分野での用語の一貫性につながることを望まれます。

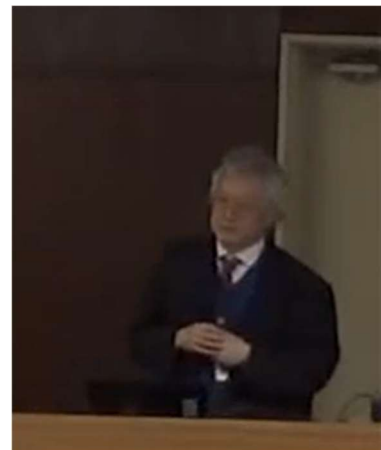
◎ ◎ ◎

続く発表は、長塚全氏の「声帯振動パターンと喉頭位置を調整した際のMRIによる喉頭軟骨の計測」。長塚氏は、ヴォーカリストや声優の発声が専門の、いわゆる「ポピュラー系」の指導者です。今回は、喉頭の位置3種と厚さ3種の組み合わせによる計測、それに伴う頸椎の後



弯についての興味深い発表でした。今回は2名の被験者による計測結果でしたが、さらに被験者を増やして声種・音高による変化のデータも蓄積し、声楽・非声楽発声の構造の解明、指導法の構築に役立てていきたい、という心強い展望も示されました。歌い手・指導者としてはクラシック系が大半を占める本学会においては、ポピュラー歌手や声優の発声は未知の部分も多く、質問に答えて声優が喉頭位置と声帯の厚さ・閉じ方の変化によって声色を使い分ける「実演」を披露していただくと、会場からは驚きの拍手が起きました。また、こうした使い分けによる声帯への負担とパフォーマンスとして人を引き付けることのバランスはむずかしく、プロとして活躍していくには日頃のケアが重要だそうです。今後は、ミックスヴォイスなどについても研究予定とのこと、さらなる成果を期待するところです。

最後の研究発表は、三枝英人氏による「ヒトの舌尖の特殊性と運動制御について考える：舌尖の比較解剖学的研究から」。舌を嚙んでしまう、むせる、いびき、呂律が回らないなどは、他の動物には見られない、ヒトならではの問題です。日常的にはほとんど無意識に口の中で動き回っている「舌」は、比較的脂肪が多い舌尖から後方にかけて実に多くの筋肉があり、複雑な構造をしています。ヒトの進化の過程をたどって、乳児から成人への成長過程で喉頭の位置が変化し、それに伴って下顎骨、舌骨、喉頭の距離が離れていくことが「言葉」や「歌」につながるなど、まさに「身近な神秘」に分け入るような不思議な世界への案内でした。「直立姿勢の乱れによって舌尖の自由が奪われる」とのお話には、思わず背筋を伸ばしたくなりました。



◎ ◎ ◎

昼食休憩をはさんで、午後は「パネルディスカッション 歌唱における共鳴について」で開始です。最初に座長である竹田数章氏より歌唱の共鳴・体の響きについて、「その感覚は歌手によって異なることもあり、また求められる響きはジャンルによって異なるため、これが正解ということはないが、響きによってさまざまな『音色感』が生じる、表現の多彩さを生むうえで大切な要素である」という説明がありました。その後、パネリストの近藤直子氏（合唱指揮者）が、アマチュア合唱団の練習で行っている ATT（Atem-



Tonus-Ton 呼吸－筋緊張－音・声）エクササイズを紹介。知らぬ間に凝り固まった身体をほぐすため健康教室でも行っているという

このエクササイズを参加者で体験しました。理屈で考えがちな現代人にとっては、こうして自分の身体に対する感覚を呼び覚ますことが必要とされているのかもしれませんが。続いて、竹田数章氏による人工喉頭の紹介、喉頭原音（ピッチ）、共鳴器官（音色）、母音による舌の動きの変化などについての解説、そしてパネリストの皆さんが実際に指導で使っているメソッドの紹介、フロアからの質問も交えてディスカッションは進みます。舌根は…基本の母音は O（オ）でそこ

からタテの響きにより他の母音を作る（三縄みどり氏：ソプラノ）、舌根は柔らかく動かせる状態に（吉田浩之氏：テノール）、不自然に奥まった状態は良くない（上杉清仁氏：カウンターテノール）。歌う時の子音と母音の関係は…子音の上に母音を乗せる（三縄氏）、L・Rでの発声が有効（吉田氏）。さらには、軟口蓋を上げるから舌根が下がるのか、舌根を下げるから軟口蓋が上がるのか、「Maschera」とは？「まわす（Girare）」とは？「集め



る」とは？ あごの適切な位置は？ 「あける」とは何を意味するか？ などなど話題が話題を呼び、到底 2 時間では収まらないディスカッションとなりました。第 2 弾の企画も検討の余地あり、です。

◎ ◎ ◎

例会を締めくくるのは、森谷真理氏による「現役声楽家の演奏とお話」。ヘンデル、シャルパンティエ、プッチーニのオペラアリアを、持ち味の豊かな声を自由自在に操り、ある時はしっとりまたある時は軽やかなアジリタで、約 30 分間たっぷり聴かせていただきました。その後のお話はアメリカでのレパートリー作りからデビューへの道について。アメリカに多い 2000 人規模のホールでオペラを歌うにはいくらか重めの声が求められると感じた、キャリアを築いていくうえで、まずどの Fach（役）で自分の声を売り出していくのかを問われた、など海外でオーディション受けるにあたっての体験談を語ってくださいました。自分の楽器の特性をよく理解する、年齢とともに変化することをも考えあわせて歌手としての将来を見据えていく、といったキャリ



アに対する考え方、それはさながら師とともに練る人生の作戦会議のようでもあります。こうした「歌手になるためのシステム」が日本においても必要であるとともに、今後はますます「セルフプロデュース能力」が求められる、との言葉は、海外で活躍してこられた森谷氏ならではの説得力を持つものでした。

こうして秋の一日は、多くの実りとともにあっという間に夕暮れ時。第 116 回例会での再会を楽しみに散会となりました。

なお、この第 115 回例会については、『声楽発声研究 No.15』に詳細報告が掲載されます。

(広報部・入川)



◆ 第116回例会・第61回総会のお知らせ

例年5月最終日曜日に行われている例会・総会を、今回は6月1日（日）に開催します。会員の皆さまには、すでにメール・ハガキにてお知らせしています。お間違いのないようお願いいたします。なお、来年度以降の日程に関しては、理事会にて検討中です。

～ ～ ～ ～ ～

【日時】2025年6月1日（日）9：55～16：30

【会場】東京藝術大学 大講義室 5-109 および第6ホール

【プログラム】

A 研究発表

10：00～ 口蓋咽頭筋による発話時の軟口蓋の高さ調節についての機能生理学的研究

発表者：小町太郎・三枝英人 座長：竹田数章

10：35～ 声楽家の脳科学実験からわかること

発表者：田中昌司 座長：三枝英人

総会

11：15～12：00

B シンポジウム「日本歌曲の歌唱法・指導法・選曲・発声法等について」

13：00～14：30

モデレーター：佐々木正利

講師：青山恵子、鮫島有美子、三縄みどり

C 公開レッスン「日本歌曲～ひとりの表現者として～」

14：50～16：20

司会：佐々木正利

講師：鮫島有美子

受講生：公募により決定（応募締切 4/30）

※ 総会をご欠席の場合、必ず委任状をご提出ください。

※ 最新情報は、ホームページにてご確認ください。

◆ 第117回例会、夏季研修会のお知らせ

○ 第117回例会は、2025年11月30日（日）開催予定（日程・会場が変更となる場合あり）です。研究発表をご希望の方は、5月末日までに発表題目と氏名を明記した発表概要（1000～1200字）を事務局までご提出ください。「研究発表規定」記載のとおり、例会における口頭発表には研究発表と実践発表があり、「声楽発声および声楽・その指導に関するもの」となっています。日頃の演奏・指導を通じての会員の皆さまのご応募をお待ちしております。

○ 2025年夏季研修会は、8月25日（月）、26日（火）に日本福音ルーテル教会（東京・新大久保）にて開催予定です。

◆ 新入会員紹介

正会員としてお迎えした3名から、自己紹介のご投稿をいただきましたのでご紹介します。

(50音順・敬称略・①略歴②抱負など)

○角田 由喜 (すみだ ゆき)



①札幌大谷大学音楽科声楽専攻卒業。ドイツ歌曲を中心に演奏活動を行うほか後進の育成を行っている。

②札幌市出身の角田由喜です。あらゆる方面から声の研究に触れる機会を頂き大変嬉しく思っています。いかに自然な発声で美しい響きで歌うかという永遠の課題を胸に深く学びたいと思っております。宜しくお願いいたします。

○高橋 純 (たかはし じゅん)



①京都市立芸術大学声楽科卒業。同大学大学院博士(後期)課程修了。博士号(音楽)取得。大阪芸術大学短期大学部専任講師、同大学演奏学科兼任講師。京都市立芸術大学、神戸学院大学、夕陽丘高校音楽科各非常勤講師。

②2024年5月に特別講演の機会をいただいたことをきっかけに、入会させていただきました。私は、音声の周波数分析やリアルタイムMRIを用いた歌唱中の体内運動の観察など、歌声に関する科学研究を行っております。今後、皆様と様々な交流や情報交換ができることを楽しみにしております。

○町田 健児 (まちだ けんじ)



①東京芸術大学音楽学部声楽科卒業 東京音楽大学院修士課程声楽専攻独唱領域2年在学中。現在 筑波大学附属駒場中学高等学校音楽科専任教諭、武蔵野音楽大学音楽学部 音楽総合学科音楽科指導法講座非常勤講師

②この度は入会をお認め頂きありがとうございます。男声合唱を中心に研究しており、発声法等の学びを深く致したく入会いたしました。今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。

日本声楽発声学会へようこそ！

今後のご活躍をお祈りしております

当学会では、随時新入会員を募集しています。正会員1名の紹介とともに入会申込書をご提出いただき、理事会で承認後、正会員として登録されます。学会の活動に興味を持っている方が身近にいらっしゃいましたら、ぜひお声かけください。

詳細は事務局までお問い合わせください。

日本声楽発声学会事務局 QRコード→



///理事会動静///

この時期、理事会では総会に向けて議案書を作成、決算報告・予算案作成、来年度の行事準備と、もっとも多忙な時期となります。IT 促進部は理事会内の意見交換を円滑にすべく「理事会チャット」を構築中、学会理念検討委員会でも学会の将来を見据え「理念」について議論を交わしています。次号では、各部・委員会より進展状況の詳細をお伝えいたします。

● 理事会記録（2024 年 10 月～2025 年 3 月）

理事会は、会長の招集により適宜開かれ、事業や刊行物の進捗状況を確認、また、新たな提案の審議、新入会員の承認などを行っています。

	日時	場所および出席理事	主な議題
第 6 回	2024 年 10 月 21 日（月） 19:00～20:50	Zoom 佐々木、齊藤、竹田、森井、 入川、上杉、梅村、三枝、 佐橋、田中、西浦、渡辺	第 115 回例会について／夏季研修会について／理事会議事録作成者について／新入会員承認 他
第 7 回	2024 年 11 月 18 日（月） 19:00～20:45	Zoom 池田、齊藤、竹田、森井、 入川、梅村、三枝、鈴木、 田中、西浦、渡辺	第 115 回例会作業分担等について／2024 年夏季研修会報告／来年度以降の夏季研修会会場について／新入会員承認 他
第 8 回	2024 年 11 月 24 日（日） 18:00～20:00	東京文化会館小会議室 佐々木、池田、齊藤、竹田、 森井、入川、上杉、梅村、 小森、三枝、鈴木、渡辺	第 115 回例会の反省／今後の例会、夏季研修会について／各部門の活動状況報告／会費未納と運営資金について／理事会内の組織について 他
第 9 回	2024 年 11 月 28 日（木）～ 12 月 9 日（月）	メーリングリスト審議	第 116 回例会・総会日程および会場について
第 10 回	2025 年 1 月 20 日（月） 19:00～21:00	Zoom 佐々木、池田、齊藤、竹田、 森井、入川、梅村、三枝、 佐橋、鈴木、田中、渡辺	第 116 回例会プログラムについて／夏季研修会プログラムについて／第 117 回例会について／会則等改定について／新入会員承認 他
第 11 回	2025 年 2 月 17 日（日）～ 2 月 28 日（金）	メーリングリスト審議	第 116 回例会プログラムについて
第 12 回	2025 年 3 月 31 日（月） 19:00～20:55	Zoom 佐々木、池田、齊藤、竹田、 森井、入川、上杉、梅村、 小森、三枝、佐橋、鈴木	学会通信第 53 号企画について／第 116 回例会・第 61 回総会について／公開レッスン受講者公募について／新入会員承認 他

（欠席理事からは、事前に委任状およびご意見を提出していただいています）

● 執行部会記録（2024 年 8 月～2025 年 4 月）

執行部会では、さまざまな観点から原案を作成し、吟味を行った後、理事会に議題を提案します。

	日時	
第 4 回	2024 年 8 月 5 日（月） 19:00～21:00	Zoom
第 5 回	2024 年 10 月 4 日（金） 19:00～21:00	Zoom
第 6 回	2024 年 10 月 29 日（火） 22:00～23:00	Zoom
第 7 回	2024 年 11 月 6 日（火） 20:00～22:00	Zoom
第 8 回	2024 年 12 月 2 日（月） 19:00～21:00	Zoom
第 9 回	2025 年 1 月 13 日（月） 18:30～21:00	Zoom
第 10 回	2025 年 2 月 10 日（月） 19:00～21:00	Zoom
第 11 回	2025 年 3 月 25 日（火） 19:00～21:00	Zoom
第 12 回	2025 年 4 月 22 日（火） 19:00～19:45	Zoom

事務局からのお知らせ

- ◎第 61 回総会委任状の提出方法が変更となっていますのでご注意ください。やむを得ず欠席される方は、期日までに必ずご提出ください。
- ◎第 116 回例会にて、アンケート実施予定です。ご協力をお願いいたします。
- ◎研究発表、出演者募集などの詳細は、学会通信、ホームページにてご案内しています。ご確認のうえ、奮ってご応募ください。
- ◎各種連絡を確実にするため、メールアドレスのご登録をお願いしています。
未登録の方は、事務局までご一報ください。
- ◎会費の納入をお忘れなくお願いいたします。
- ◎ホームページには、学会通信カラー版を掲載しています。



編集後記

東京の桜は、咲いたと思ったらあっという間に桜吹雪、今では新緑を通り越してすっかり深緑となりました。全国の会員の皆さまは、今どのような季節を迎えていらっしゃるのでしょうか。それぞれの土地にそれぞれの気候や特産物があるように、ひとりひとりにそれぞれの生き方、それぞれの「こえ」がある…そんな当たり前のことを大切にしていきたいと願う今日この頃です。(入川)

日本声楽発声学会事務局 佐々木 徹

e-mail:info@jars-voice.org

Tel/Fax:03-6804-0626

〒154-0002 東京都世田谷区下馬 3-14-4

振替口座：00170-0-119920

日本声楽発声学会 HP

<http://www.jars-voice.org/>



学会通信第 53 号

2025 年（令和 7 年）5 月発行

発行者：日本声楽発声学会

編集者：入川めぐみ 上杉清仁

齊藤祐 森井佳子